

『源氏物語』における春秋優劣論の展開

—秋好中宮の役割と関連して—

本 橋 裕 美

一、序

『源氏物語』の正編において、六条院という空間が果たす役割は非常に大きい。光源氏という人物の栄華を時に体現し、時にその衰えや挫折をも顕在化する。六条院が住居としての機能に留まるものではなく、有形無形の物語を示す空間としてあることは、既に自明であろう。本稿では、その六条院において重要な要素である四季意識、特に春秋の競いに焦点を当てて論じていきたい。広大な屋敷を四つに分け、四季を配置するという秩序、またその中で春の町と秋の町という対が、他の町を圧倒するという関係性について、秋の町の主である秋好中宮の存在意義を軸に、考察していく。

二、薄雲巻の春秋優劣論

本論に入るにあたって、六条院生成の原動力となった薄雲巻の場面を見ていきたい。六条院の四季の町が作られていく背景には、藤壺の死、冷泉帝出生の秘の漏洩といった大事が描かれた薄雲巻

での、斎宮女御との会話が置かれていた。斎宮女御が秋という季節を選びとったからこそ、六条院は作られていくといっても過言ではない。それはどのような会話であり、どのような意図が隠されていたのか、まずは春秋優劣に関する源氏の問いかけを見てみたい。藤壺の薨去があつた年の秋、里下がりした斎宮女御に対して、源氏は恋情を吐露していく（注1）。自分が女御に懸想していることを言い、女御がそれを受け止めずに沈黙によって拒否すると、源氏はその恋情を自身で収束させ、幼い我が子への後見を頼む。更に話題を転じ、次のように女御に問うのである。

「はかばかしき方の望みはさるものにて、年の内ゆきかはる時々の花紅葉、空のけしきにつけても、心のゆくこともしはべりにしがな。春の花の林、秋の野の盛りを、とりどりに人あらそひはべりける、そのころのげにと心寄るばかりあらはなる定めこそはべらざなれ。唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべめり、大和言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。狭き垣根の内なりとも、そのをりの心見知るばかり、春の花の木をも植ゑ

わたし、秋の草をも掘り移して、いたづらなる野辺の虫をも住ませて、人に御覽ぜさせむと思ひたまふるを、いづ方にか御心寄せはべるべからむ」
(薄雲②四六一—四六二)

春と秋のどちらを好むかという、至って直接的な問いかけである。源氏はなぜ、この問いかけを選んだのか。単なる話題転換なら、他の話題もあるだろう。源氏の意識に、六条院構想があったからというだけでは不十分である。春秋を定めるといふこと自体に意味があるからこそ、この問いかけになるのである。そもそも、春秋優劣論とはどのようなものであろうか。源氏の問いかけの中には、すでに春秋優劣論への見解が含まれている。それらを手挂かりに、『源氏物語』以前の春秋定めについて考えていきたい。

源氏は、いくつかの対立的な構図を述べている。「春の花の林」「秋の野の盛り」、「春の花の錦」をよしとする「唐土」と「秋のあはれ」を取り立てる「大和言の葉」、「春の花の木」と「秋の草」などである。春秋定めに関しては、多く先行研究のある『万葉集』の額田王による春秋競憐歌(注2)や『拾遺和歌集』を始めとする春秋の和歌の数々(注3)、また『論春秋歌合』や『宰相中将君達春秋歌合』などの歌合(注4)、或いは『枕草子』(注5)を含めた春秋優劣論史を源氏は意識した上で、斎宮女御へその定めを求めているのである。詩歌と季節の関わりは深い。特に、春秋の優劣を定めることは、古代から興味深いものとされ、同時に、「唐土」の春優位の文化を受容しつつ、和歌という「大和言の葉」においては秋を選びとった、詩歌そのものの歴史とも関わる事柄である。「冷泉聖代」(注6)が現出しつつあるからこそ、問いかけであろう。容易に定めのつかない「春秋優劣論」が定められるとすれば、それこそ文芸の振興する冷泉帝御代がその舞台となる

う。勿論、「春秋優劣論」の向かう所は源氏の六条院であり、絵合の如く春秋の競いが宮中で行われるわけではない。栄華の極められる場が、冷泉帝御代ではなく、源氏の私的空間の中で形成される道筋への移行が見られよう。或いは、冷泉帝が実父を知ったことによつて、帝ではなく源氏が絵合以上に価値のある「定め」(注7)を行つていこうとする意識さえ、見ることでできるかもしれない。それについてはひとまず置き、ここでは斎宮女御がどう応じていくのかを見ていきたい。

春秋優劣への問いかけは、先に述べた通り恋情の表出の後であるが、二条院に退出している斎宮女御を源氏が訪ねる場面を、まずは見ておく。

秋ごろ、二条院にまかてたまへり。(中略)秋の雨いと静かに降りて、御前の前栽の色々乱れたる露のしげさに、いにしへのこともかきつづけ思し出でられて、御袖も濡れつつ、女御の御方に渡りたまへり。(中略)昔の御事ども、かの野宮に立ちわづらひし曙などを聞こえ出でたまふ、いとものはれと思したり。
(薄雲②四五八—四五九)

一連の遣り取りがすべて、この秋の雨を舞台背景として行われたものであることを確認しておく。季節の優劣を定める時の、実際の季節は重要である(注8)。そもそも、源氏が斎宮女御の元を訪れること自体が、秋の野宮を中心とした昔語りを目的としているのである。先に述べたように、源氏は、唐土は春、大和は秋を好むものという制限を設ける。これはすなわち、漢詩と和歌の対比である。これまでも内気さが強調されてきた女御が、漢詩を引き合いに出すとは考えにくい。かといつて春を称揚する和歌を口ずさむのでは源氏を否定することになる。また「春の花の木」

と「秋の草」を對比させているにもかかわらず、「いたづらなる野辺の虫」を付け加えることで、秋の野を模した庭の連想を呼び起こす。加えて、先に述べたように現在の季節は秋に他ならない。躊躇しながら、斎宮女御は次のように答えるのである。

「ましていかと思ひ分きはべらむ。げにいつとなき中に、あやしと聞きし夕こそ、はかなう消えたまひにし露のよすがに

も思ひたまへられぬべけれ」

(薄雲②四六二)

これには、「いつとても恋しからずはあらねども秋の夕べはあやしかりけり」(『古今集』恋一 545 読人しらず)の歌が踏まえられている。源氏の言葉通りに、「大和言の葉」である古今集の和歌から「あやし」の語を引いて、しかし恋の歌ではなく、あくまで私的な母への心情として定める。源氏と六条御息所の間を結ぶ秋の野宮でもなければ、源氏の言う「秋のあはれ」でもない。先にも、源氏は恋情を吐露する中に、「あはれとだにのたまはせずは」(薄雲②四六〇)と述べていた。しかし、女御は秋を「あはれ」でなく「あやし」とした。春秋優劣論が再び源氏の恋情へと回歸する可能性は十分にあり、實際戻り掛けていながら、女御に逃げられる結果となったのは、女御が秋の「あはれ」を選択しなかったからであろう。更に、斎宮女御の「あやし」は、秋という季節そのものを表しているのではなく、秋を媒介として母・六条御息所への思いを見る。秋は「露のよすが」である。「秋の女君」はむしろ、御息所にあつた属性であろう。

これまでの六条御息所の登場場面と季節を見てみたい。斎宮の初斎院が秋であり、源氏が物の怪の歌を聞いたのも、葵の上の死を受けた歌を遣り取りしたのも皆同時期に当たる。次の消息は一年後の秋、ここでも触れている野宮の別れの場面となる。須磨で

の文通は季節を定めたいが、落標巻での死去は女御の言う通り、秋であつた。六条御息所、ひいては斎宮女御の「秋」は、野宮の別れを重視する源氏が、勝手に付与した季節性ではない。葵の上の死が秋であり、その季節を負うかのように、一年後に野宮の別れがあり、時を経て六条御息所は同じ季節に死んでいく。それは源氏の六条院構想よりも早くから、確かにあつた関係性であると言えよう。むしろ、秋と六条御息所の密接な関係があつたからこそ、六条院構想が生じたとも考えられる。源氏は斎宮女御に、次のような述懐を漏らしていた。

「過ぎにし方、ことに思ひ悩むべきこともなくはべりぬべかりし世の中にも、(中略)つひに心もとけずむすばほれてやみぬること、二つなむはべる。一つは、この過ぎたまひにし御事よ。あさまじうのみ思ひつめてやみたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも仕うまつり御覧ぜらるるをなむ、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙のむすばほれたまひけむはなほいぶせうこそ思うたへらるれ。」

(薄雲②四五九—四六〇)

これまでの自身の恋の遍歴を言い、中でも二つの恋が心残りとしてあるという。その一つが御息所のことであり、もう一つについては「いま一つはのたまひさしつ。」(同)と、口にしない。藤壺のことであろう。源氏の、前斎宮への恋情の表出が、藤壺の死を受けたものであることを示唆する謂いである。そして、今なお六条御息所が源氏の過去の中に暗然とした影を落とすものである以上、源氏は自分の栄華のためだけでなく、六条御息所のために、女御を優遇せねばならない。源氏は、過去の後悔を現在に還元し、斎宮女御を通じて、六条御息所の落とす影を取り払おうとするの

である。しかしまた、斎宮女御が秋の女君として仕立て上げられていくことは、斎宮女御にしてみれば、秋の女君である母親を、強制的に纏わされていくことに他ならない。源氏が秋という季節を斎宮女御に付与すればするほど、后として時めく彼女の向こうに、不運であつた六条御息所の影を見ることになるのである。

薄雲巻の春秋優劣論は、源氏の恋情の表出を乗り越えて、榮華へ向けた関係の再構築の場であつた。しかしまた、冷泉帝治世の繁栄と源氏の榮華が、同じものでなくなつていく、転換期でもある。ここにおいて、斎宮女御は「秋の女君」という属性を付与される。源氏の私的空間に、どう取り込まれていくかを示唆する称号であり、そして本来の「秋の女君」である六条御息所を、斎宮女御がいかに纏つていくかを、示している場面であつたといえよう。

三、六条院 秋の町

薄雲巻で形作られた「秋の女君」斎宮女御は、少女巻での立后を経て、同じく少女巻末、完成した六条院の秋の町に住むことになる。薄雲巻で据え直された源氏と斎宮女御の協力関係は、六条院という媒体によつて、より明確にされるのである。まずは、この六条院と、そこに置かれた「秋の町」という空間について考えていきたい。先行研究の上では、源氏の邸宅が六条御息所の暮らした土地の上に築かれることに、御息所鎮魂の意識を見る説（注9）があり、極めて重要な指摘である。六条院が「中宮の御旧宮」を取り込んでいることは、次の場面にある。

八月にぞ、六条院造りはてて渡りたまふ。未申の町は、中宮

の御旧宮なれば、やがておはしますべし。

（少女③七八）

秋好中宮が、源氏に寄贈したものであろう。前述した、悔いが残る源氏の恋のうちの一つ、六条御息所への鎮魂意識は、確かにあろう。そしてまた、口にすることもできないもう一つ、藤壺との恋もまた、六条院に置かれている。秋の町と対になる、春の町である。苦い思いは残るものの、少女巻の時点でどこにも死霊の影のない六条御息所に対して、藤壺は朝顔巻で夢に出てきている（注10）。鎮めるべき存在としての認識は、むしろ藤壺の方が強いのではないか。

薄雲巻で斎宮女御が秋を選択したからこそ、紫の上には「君の春の曙に心しめたまへるもことわりにこそあれ」（薄雲②四六四—四六五）と、源氏によつて春の女君という属性が付与された。流れの上ではそうなるが、源氏にとって「春の女君」に紫の上以外を置く可能性はないに等しい。先述のように、斎宮女御の秋好みは誘導問的に導かれたものであつた。そして、同じく薄雲巻、紫の上が春の女君でなければならぬ決定的な理由が描かれていた。藤壺の死である。源氏は藤壺哀悼の心情を、桜に託している。

二条院の御前の桜を御覧じても、花の宴のをりなど思し出づ。「今年ばかりは」と独りこちたまひて、（中略）雲の薄くわたれるが鈍色なるを、何ごとも御目とどまらぬころなれど、いとものあはれに思さる。

入日さす峰にたなびく薄雲はもの思ふ袖に色やまがへる人聞かぬ所なればかひなし。

（薄雲②四四八）

「今年ばかりは」の言葉は、「深草の野辺の桜し心あらば今年ば

かりは墨染めに咲け」(『古今集』哀傷 832 上野岑雄)を引いた、一人きりの哀傷である。その背景には、花宴巻に描かれた南殿の桜の宴があり、華やかな宴の桜のイメージと、喪失から来る墨染めの桜のイメージが藤壺には付与されている。「紫のゆかり」である紫の上が、春の女君として確定するのは、この藤壺の死があったからであろう。

源氏側から六条院構想と春秋の配置を見る時、両町がある理由がよく似ているのではないか。即ち、墨染の桜を連想させる藤壺の死を受ける紫の上と、その死を含めて秋に象徴される六条御息所を負う斎宮女御である。源氏が斎宮女御への恋情を吐露する中に思い返された「心もとけずむすばほれてやみぬる」二つのことは、源氏の中で六条院構想の二柱として転換されたと考えられる。しかしまた、死者を鎮魂するという目的も認められる一方で、源氏が後悔を抱く二人の女性の縁者を置くことで、源氏自身の心を鎮めるという目的も、重要なものとしてあったと考えられる。

四、少女巻 春秋の競い

紫の上と秋好中宮、六条院の二柱は、それぞれの季節を代表して、春秋の競いを繰り広げる。その始まりが、少女巻末である。

九月になれば、紅葉むらむら色づきて、宮の御前えもいはずおもしろし。(中略)御消息には、

心から春まつ苑はわがやどの紅葉を風のつてにだに見よ
若き人々、御使もてはやすさまどもをかし。御返りは、この
御箱の蓋に苔敷き、巖などの心ばへして、五葉の枝に、

風に散る紅葉はかるし春のいろを岩ねの松にかけてこそ

見め

この岩根の松も、こまかに見れば、えならぬつくりごとどもなりけり。かくとりあへず思ひよりたまへるゆゑゆるしさを、をかしく御覧す。御前なる人々もめであへり。

(少女③八一—八二)

この春秋の競いは、恐らく源氏の意向を汲んで行われたものであろう。従来の研究成果からは、この春秋の競いが紫の上のためであったことが指摘されている。針本正行氏は、紫の上が秋好中宮の秋に対する女君であることが強調されることが、少女巻に続く玉鬘物語や明石の君の存在とも関わつてくるとした上で、「藤壺崩御後の物語の始動」であると述べている(注11)。春秋定めという古くからの優雅な論点でもって中宮に挑まれる紫の上、という構図が、紫の上を高める効果をもたらし、新たな物語を構築する。

四季を同等に持て囃すのではなく、春秋を中枢に置き、夏と冬を配する六条院の完成が秋であったことも、そしてこの競いが始められたことも、源氏の作為の結果と考えられる。秋好中宮の挑みに対して、紫の上は「風に散る紅葉はかるし」と真つ向から受けている。「えならぬつくりごと」である岩根の松につけて返された歌は、秋好中宮も感嘆する出来であった。この贈答が華麗に成立したことで、紫の上に代表される春の町が、中宮率いる秋の町に対座する構図が明確になるのである。春の町は、紫の上だけでなく源氏の居場所であるが、この春秋の競いがあることで、紫の上は「女主人」の座を手に入れたといえよう。李美淑氏はこの点を更に展開させ、紫の上の返歌に、明石の姫君への支援を依頼する養母としての思いを読み取っている(注12)。将来の后がねを擁する紫の上の、春の町に留まらない重要さが確認できよう。数少

ない源氏の子の中でも、一門の繁栄を思えば、明石の姫君こそもつとも大事な存在である。それに拠っている紫の上の春の町は、秋好中宮が未だ子を持たない現在の時点で源氏の「門」の中心である。

ここまで、少女巻の春秋の競いを紫の上側の必然から詳述してきたが、秋好中宮のこれまでの控えめな態度と、ここでの挑みとの間には違和がある。中宮という威勢を存分に發揮し、源氏の支援を受けるというより、六条院に栄華を与える立場にある秋好中宮像が、新たに描かれていよう。冷泉帝治世の中宮として、その立場は揺るぎないものであるが、一方でそれはこの六条院という場所で確認される。宮中で行われるものではなく、内容も冷泉帝治世と関わりがない。その影響は、紫の上とその養女という六条院空間に留められる。華々しければ華々しいほど、秋好中宮の栄華の行く末に漂う一抹の不安が示唆されてもいないだろうか。子を産まずに中宮に昇ったことは、天皇の生母として皇統を繋ぎ、御代に君臨するという栄華を、秋好中宮から遠ざけている。一方の紫の上にしても、抛り所である明石の姫君は実子ではない。六条院の中樞を成す春と秋の交流は、あくまで六条院生成時の栄華を象徴しているのであり、それは確かに源氏の望んだものであるが、同時にその栄華はそのままには維持されない。源氏の理想的な六条院を象徴する春秋の競いは、どこへ向かうのだろうか。

五、胡蝶巻 春秋の競い

春秋の競いは、胡蝶巻において結論が出される。

三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よ

りことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらしう見え聞こゆ。(中略)

中宮、このころ里におはします。かの「春まつ苑は」とはげましきこえたまへりし御返りもこのころやと思し、大臣の君も、いかでこの花のをり御覽せさせむ、と思しのたまへど、ついでなくて軽らかに這ひ渡り花をももて遊びたまふべきならねば、若き女房たちの、ものめでしぬべきを舟にのせたまひて、南の池の、こなたにとほし通はしなさせたまへるを、小さき山を隔ての関に見せたれど、その山の崎より漕ぎまひて、東の釣殿に、こなの若き人々集めさせたまふ。

(胡蝶③ 一六五—一六六)

時期は三月の二十日、晩春である。少女巻で先延ばしにされた、春の町の主張を紫の上が「このころや」と思い、源氏もまた春の町の盛りの中宮に見せることを望むが、身分柄なかなか叶わない。代わりに中宮付きの若い女房を呼ぶのである。船樂の音を秋の町で聞いた翌朝、中宮のもとに紫の上から季の御説経のための花と歌が届く。

童べども御階のもとに寄りて、花ども奉る。行香の人々取りつぎて、関伽に加へさせたまふ。御消息、殿の中將の君して聞こえたまへり。

らむ

花ぞののこてふをさへや下草に秋まつむしはうとく見る

宮、かの紅葉の御返りなりけりとほほ笑みて御覽ず。(中略)御返り、「昨日は音に泣きぬべくこそは。」

こてふにもさそはれなまし心ありて八重山吹をへだてざりせば」

とぞありける。

(胡蝶③ 一七二—一七三)

少女巻で完成した六条院に足りなかった年ごろの女君も、夕顔の遣児・玉鬘の参入により華やぎを加えている。胡蝶巻における春秋の競いは、より完成された榮華の中で語られていくように見える。

しかし、晩春という季節設定はなぜだろうか。他の町では桜の散った、三月の二十日頃である。紫の上と春、特に晩春の結び付きにおいて、源氏との出会いの場であった北山の春が意識されていることは指摘できるだろう。春の遅い北山と同じく、晩春にも桜が咲いている春の町は、出会いに依拠した結び付きを保証するものであるが、春の町の権威が、必要以上に高められているようにも思われる。紫の上が奉った花は、桜だけではなかった。

春の上の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ。鳥、蝶にさうぞき分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。

(胡蝶③ 一七一—一七二)

鳥と桜の取り合わせと対になるように奉られたのは、胡蝶と山吹であった。山吹は晩春の花である。現実の季節に対応するのは山吹の方であって、春の町という特殊な空間から離れれば、桜は風に散ってしまふ。女君を喩える花として見れば、山吹は玉鬘に他ならない(注13)。しかしここでは、玉鬘よりも紫の上と山吹の関連を見るべきであろう。山吹には、重大な意味がある。

花咲きて実は成らずとも長き日に思ほゆるかも山吹の花

『万葉集』 1860 花を詠める)

紫の上自身を象徴する桜の花と共に贈られた山吹には、同じく子

を持たない悩みを抱くであろう秋好中宮に、無意識に訴えるものがある。六条院の中樞を担う二人の女主人は、共に実子を持たず、華やかな榮華の中に見えない不安を持っているように。にもかかわらず、紫の上は中宮に「物隔ててねたう」思わせることで、この争いに勝利する。八重山吹が二人を隔てるのであり、春の町と秋の町の均衡は、早くも崩れていよう。

付け加えれば、胡蝶巻の船樂の様子は、極めて「唐土」のイメージを負っている。

童頭鵞首を、唐の装ひにことごとしうしつらひて、楫とりの棹さす童べ、みな角髪結ひて、唐土だたせて、さる大きな池の中にさし出でたれば、まことの知らぬ国に來たらむ心地して、あはれにおもしろく、見ならはぬ女房などは思ふ。中島の入江の岩陰にさし寄せて見れば、はかなき石のたたずまひも、ただ絵に描いたらむやうなり。

(胡蝶③ 一六六—一六七)

薄雲巻、春秋優劣論の中では、春と唐土、秋と大和言の葉の対比があった。唐風の春の町(注14)と、和歌的情景に彩られた秋の町の対比構造が、拮抗する在り方であろう。しかし、春は秋の町を浸食する。折しも季の御説経の日、初音巻で「生ける仏の御国」(③一四三)と極楽浄土の現出と称揚された春の町は、その仏教的イメージを負って中宮の町に入り、春秋の競いに決着をつけるのである。また、小林正明氏は、春の町に世界の中心であるはずの蓬萊の中島がおかれることで、四方四季の均衡が崩れていることを指摘する(注15)。多くの筆を費やして描かれる春の町の素晴らしさと引き替えに、春と秋の対比は崩れている。少女巻の春秋の競いは、紫の上に象徴される春の町を、中宮の秋の町と対抗

しうる立場に高めるものであった。しかし、胡蝶巻ではすでに逆転してしまふのである。少女巻で、その華やかな遣り取りの中に垣間見えた不安な将来は、一つの決着をつけることで均衡を崩した胡蝶巻にも底流している。だが、均衡の崩れた両者は、それぞれがそれぞれの方法で、対処していくしかないものであり、互いに支え合う道は閉ざされているように。

六、乖離する「秋の町」と秋好中宮

六条院に再び秋が巡ってきた時、春秋の競い再開の可能性はあった。秋という季節に、今度は秋が称揚されるならば、先の胡蝶巻における春の勝利は、現実の季節に導き出された結論であって、春秋の均衡という六条院の秩序に支障はない。しかしながら、再び訪れた秋、野分巻において、春秋の競いは行われず、それどころか野分によって秋という季節性は壊されてしまふ。

中宮の御前に、秋の花を植ゑさせたまへること、常の年よりも見どころ多く、(中略) 心もあくがるるやうなり。春秋のあらそひに、昔より秋に心寄する人は数まさりけるを、名だたる春の御前の花園に心寄せし人々、またひき返し移ろふ気色世のありさまに似たり。

これを御覧じつきて里居したまふほど、御遊びなどもあらまほしけれど、八月は故前坊の御忌月なれば、心もとなく思しつづ明け暮るるに、この花の色まさるけしきどもを御覧するに、野分例の年よりもおどろおどろしく、空の色変りて吹き出づ。

(野分③二六三—二六四)

野分巻冒頭では、春秋の競いの思わせる描写が続くが、「八月は

故前坊の御忌月」であり、管弦の遊びなど、胡蝶巻の船楽に対抗する華々しい行事ができずにいる。そのうちに野分が訪れ、話題は紫の上の垣間見から夕霧視点の物語へと転じていくのである。夕霧が六条院の女性達を喻えていく描写には、現在の秋という季節が無視されているし(注16)、夕霧が来訪する中に含まれているにもかかわらず、秋好中宮は花に喻えられない(注17)。高貴な女性であるが、「御参りのほどなど、童なりしに入り立ち馴れたまへる」(野分③二七四)と、中宮入内の頃、まだ幼かった夕霧は、御

簾中に入ることが許されていた。優美な秋の町の暮らしぶりを、羨望をもつて見る夕霧は、秋好中宮を花に喻える素地を持っていたはずである。それが回避されるのは、中宮に恋慕するような禁忌を犯さない夕霧像のせいばかりではない。秋好中宮自身が、六条院秋の町の女主人の位置から、離れつつあるのである。

そもそも、秋好中宮の六条院における立場は、実は不透明なものであったのではないか。少女巻の六条院造築の理由を遡って確認しておきたい。

大殿、静かなる御住まひを、同じくは広く見どころありて、ここかしこにておぼつかなき山里人などをも集へ住ませんの御心にて、六条京極のわたりに、中宮の御旧き宮のほとりを、四町を占めて造らせたまふ。

(少女③七六)

隠居後の静かな住まいと、女君を集めた華やかな住まいとを両立させる場を求めた結果が、六条院である。その源氏のための住まいを、わざわざ「六条京極のわたり」「中宮の御旧き宮」に造るのである。中宮を養女として後見する、政治的栄華の面から見れば、それは自然な流れであろうが、秋好中宮の立場からすれば、どこか違和を抱かざるをえない。

源氏が冷泉帝の実父であることで、源氏の栄華は保証されている。しかもその源氏の栄華とは、かつて絵合巻で藤壺と共に目指したような、冷泉帝治世において実現されるものではない。六条院という源氏の私的世界で目指されるものであり、栄華が将来掘って立つところは、明石の姫君が入内予定の現在の東宮である。秋好中宮の六条院における立場の違和感は、その栄華が少女巻において最高潮であり、明石の姫君が育つにつれて、源氏の実子入内までの間を繋ぐ存在としての役割が鮮明になってくるからではないか。

玉鬘巻における正月の衣装配りでも、秋好中宮の衣装はなく(注18)、薫物合わせにおいても、季節と薫物の関連が重要視されているながら、秋好中宮に対する依頼はない(注19)。六条院の女君をあの手この手でイメージの中に閉じこめようとする時、秋好中宮は除外されたのである。他の「六条院の女君」は、みな源氏の手のひらの上に駒としてあるが、秋好中宮はすでに駒としての役割を終え、動かしようのない地位にいる。六条院が生成される段階において、秋好中宮は誰よりも重要な役割を果たしていた。薄雲巻で源氏の意向通りに秋を選び、中宮という立場で六条院に権威を与えた。その権威は、春秋の競いを通じて紫の上や明石の姫君にも及び、六条院世界の最初の秩序は、彼女によって形成されたともいえる。だが、六条院は変容していく。春秋の軸から、春の町のみが高められる空間に、移行していくのである。冷泉帝の子を生まない秋好中宮の役割は、六条院の栄華の基盤から、徐々に明石の姫君への後見という、将来への繋ぎに過ぎなくなっていく。胡蝶巻で春に軍配が挙げられるのは、その予兆であり、野分巻で秋の風景が壊され、六条院の他の女君へと視線が移されるのは、

秋の町の女主人の存在が、形骸化していくことを示しているよう。梅枝巻では、明石の姫君の装束の場として秋の町が描かれる。かくて、西の殿に戌の刻に渡りたまふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髪上の内侍なども、やがてこなたに参れり。上も、このついでに、中宮に御対面あり。御方々の女房おしあはせたる、数しらず見えたり。子の刻に御装奉る。

(梅枝③四二—四一三)

場所は秋の町だが、主役は当然明石の君である。腰結い役を務めたことで、秋好中宮が権威を与えていた六条院の栄華は、明石の姫君を中心とするものに移行する。その入内は藤裏葉巻であるけれども、今後の六条院を担うのは明石の姫君において他にない。秋好中宮は源氏の血を引かず、冷泉帝の子も生んでいないのである。紫の上との対面が描かれるのも象徴的であろう。これまで春秋の競いは、主人同士の行き来ではない形で行われてきたのである。実際の風景を見せるのではなく、その主張と趣向でもって優雅に繰り広げられてきた争いは、もう行われることはない。

次に秋の町が描写されるのは、藤裏葉巻の六条院行幸であるが、秋という季節であるにもかかわらず、秋好中宮は不在である。

神無月の二十日あまりのほどに、六条院に行幸あり。(中略)

巳の刻に行幸ありて、まづ馬場殿に、左右の寮の御馬牽き並べて、左右の近衛立ち添ひたる左方、五月の節にあやめわかれず通ひたり。未下るほどに、南の寝殿に移りおはします。

(中略) わざとの御覧とはなけれど、過ぎさせたまふ道の興ばかりになん。山の紅葉いづ方も劣らねど、西の御前は心ことなるを、中の廊の壁をくづし、中門を開きて、霧の隔てなくて御覧せさせたまふ。

(藤裏葉③四五八—四五九)

女主人が不在でありながら、秋の町は用を為す。それどころか、春の町から「霧の隔て」なく、秋の町の紅葉が見通せるのである。春の町は、秋という季節をも傘下に置いたと考えられる。しかし、それは秋好中宮不在の秋の町である。春秋の軸から春の町中心へ移行した六条院において、秋好中宮は秋の町から、ひいては六条院から離れつつあるといえよう。

六条院生成の原動力であり、春と秋という、六条院の優美な中軸であった中宮の秋好みは、どこへいったのであるうか。立ち戻って考えれば、六条院生成の時、藤壺と六条御息所という後悔の残る恋の代替処置として、それに連なる女君を置いたはずであった。春と秋という季節は、本人以上に、それぞれが負う女君を象徴していた。紫の上に対しては、春の女君、桜の女君としての据え直しが行われているのに、秋好中宮に対しては、それは行われないままであった。六条院は本来、源氏の「静かなる御住まひ」と、女君の集まる華やかな榮華の場との両立が目指されていた。後悔を残した二つの恋を鎮めるための、「静かなる御住まひ」であろう。しかし、六条院は、明石の姫君を后に据え、外戚として華やぐ政治的榮華へ向かつており、わざわざ「六条京極のわたり」「中宮の旧き宮」をその地としたことが、重視されなくなっている。中宮が、六条院の榮華から離れ、また「秋」からも乖離していくことは、六条院の意義を根底から揺るがす事態を招いてはいないだろうか。

七、「対」からの解消

少女巻、胡蝶巻に描かれた秋好中宮は、紫の上と対になる立場

であった。春と秋という季節の対だけでなく、藤壺を負う紫の上と、六条御息所を負う秋好中宮という、背後に抱える対も成立していた。母同士の対の関係で言えば、夕霧とも対になる。それは藤裏葉巻で、源氏によって確認されている。

大臣は、中宮の御母御息所の車押しさげられたまへりしをりのこと思し出でて、「時による心おごりして、さやうなることなん情なきことなりける。こよなく思ひ消ちたりし人も、嘆き負ふやうにて亡くなりなき」と、そのほどはのたまひ消ちて、「残りともれる人の、中将はかくただ人にて、わづかになりとのぼるめり。宮は並びなき筋にておはするも、思へばいとこそあはれなれ。すべていと定めなき世なればこそ、何ごとも思ふままにて、生けるかぎりの世を過ぐさまほしけれど、残りたまはむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ思ひ憚らるれば」とうち語らひたまひて、上達部なども御棧敷に参り集ひたまへれば、そなたに出でたまひぬ。(藤裏葉③四四六―四四七)

葵の上と六条御息所の関係は、正妻と愛人として葵の上の方が世間的には上に置かれていた。藤裏葉巻における葵の上の息子・夕霧と六条御息所の娘・秋好中宮は、それが逆転し、夕霧は秋好中宮に仕える立場にある。母同士の関係が反転して、対比されるのである。振り返れば、絵合巻では、弘徽殿女御と共に「二ところ」(②三七五)として意識されていた。絵合や春秋の競いという「定め」の世界の中で、秋好中宮は一方を選びとり、象徴的な争いをこなしてきたのである。それは、御息所が葵の上と繰り広げた車争いのような、生々しいものではなく、文化的営為であった。そして、秋好中宮の対は解消される。夕霧との対は、「ただ人」と

中宮という圧倒的な差において、また、女御同士の争いは、立后によって、それぞれ秋好中宮が上位を得ている。

ただし、六条院においては、春秋の競いは春の勝利に終わった。

少女巻で秋が勝利し、胡蝶巻で春が勝利していると見れば、それは特に過ぎないのであるが、以後の語りは胡蝶巻の春の勝利が引き続いていよう。春秋の競いにおいて勝利を得られず、六条院の栄華が春の町に集中することによって、秋好中宮は「秋の女君」の役割から乖離していく。だが、「秋の女君」が必要とされたのは、誰よりも六条御息所に対してであった。薄雲巻で選びとった「秋」は、母親と二重写しになるものであり、しかしその母親の歩んだ道と秋好中宮の歩む道は、対比的に描かれていかなければならない。立后の際の「御幸いの、かくひきかへすぐれたまへりける」(少女③三一)という世の人の感想は、それが望まれた方向に進みつつあることを示している。にもかかわらず、六条院が生成された当初に実現していた構図は、玉鬘十帖を経、梅枝巻、藤裏葉巻に至って、大きく変容している。明石の姫君を中心とする政治的栄華の中で、秋好中宮は部外者にならざるを得ない。太上天皇に准う位に就き、朱雀院、冷泉帝の行幸が描かれる藤裏葉巻は、確かに源氏の栄華が最高潮に達した場面であろう。しかし、ここに秋好中宮はいない。太上天皇に准う位を源氏に与えたのは、秋好中宮の存在ではなく、源氏と冷泉帝の隠された親子関係である。

冷泉帝の子を生まず、源氏の六条院に影響を与える立場からも下り、一代限りの冷泉帝御代の中宮として安住することが、六条御息所の望んだものでなかったことは、柏木巻以降の展開で明らかである。薄雲巻から始まった秋を好む女君としての在り方は、華々しい反面、源氏の支援を前坊・御息所の無念を晴らすために

使えず、逆に源氏の栄華を外側から支援するだけの存在にならざるを得なかった過程を浮き彫りにする。いつの間にか、源氏と秋好中宮の協力関係は、両者の栄華ではなく、源氏の栄華のためにあるものとなっているのである。

八、おわりに — 御法巻という結末 —

最後に、御法巻の場面を見ておきたい。紫の上が死去して後はじめて源氏が歌を交わす女君は、秋好中宮である。ともに看取った夕霧、葵の上の存在を通じて哀傷する致仕大臣との贈答ののち、秋好中宮の弔問が、次のように描かれている。

冷泉院の後の宮よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、「枯れはつる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけん

今なんことわり知られはべりぬる」とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ。言ふかひありをかしからむ方の慰めには、この宮ばかりこそおはしけれど、いささかのもの紛るるやうに思しつづくるにも涙のこぼるるを、袖の暇なく、え書きやりたまはず。

のぼりにし雲居ながらもかへり見よわれあきはてぬ常ならぬ世に

おし包みたまひても、とばかりうちながめておはす。

(御法②五一七)

源氏と紫の上追悼を共有する人物として、秋好中宮が選ばれるのはなぜだろうか。世の中に惜しまれる紫の上の姿を描こうとする時、適任は明石中宮であろう。その死を源氏とともに見送った、

養女ながら最愛の娘である。しかし、語りはなぜか秋好中宮の弔問に心動く源氏を描く。その答えは、秋好中宮の歌の中にある。「亡き人」である紫の上が、「秋に心をとどめ」ずに去っていった、と秋好中宮は詠う。胡蝶巻で終わっていたはずの春秋の競いが、ここで再び蒸し返されている。それも、秋にありながら春、即ち紫の上に軍配をあげる、という形である。

春には春が、秋には秋が、それぞれ勝利を収めていく優雅な六条院世界の中で、春秋の競いは行われてきた。どこかで定め之余地を残しながら展開されてきた競いも、相手を失えばそこで終えるしかない。当場面が春秋の競いの帰着点として置かれた理由は、秋に亡くなった紫の上を、春の女君として逆説的に強調しようとする営為に他ならない。幻巻の哀傷も春からはじまるものであり、三の宮の挿話など、紫の上の春好みは生前以上に強いイメージを付与されていく。その背景には、紫のゆかりの原点である藤壺の影が揺曳している。秋好中宮の弔問の前には、語り手がわざわざ、次のような断りを入れる。

「薄墨」とのたまひしよりは、いますこしこまやかにて奉れり。
(御法②五一六)

「薄墨」はむろん、薄雲巻での藤壺哀傷の時間を指している。秋好中宮が六条院秩序の「秋」から乖離した存在としてあるとすれば、紫の上は、「春の町」の女主人の座から、遙かに強い形で排除させられた存在である。秋好中宮がここでいかに春秋優劣の定めを行おうと、弔問としての美しさに留まって、空疎に過ぎない。六条院空間の象徴であった春秋の競いも、今や「慰め」でしかない。紫の上の死が春の町ではないことは、古代から行われてきた春秋優劣を定めたことさえ、空疎な私的遊びでしかなく、女三の

宮のような存在によって簡単に崩壊しうることを照らし出す。御法巻の贈答は、春秋優劣論史を意識しつつ、それを展開させようとした源氏の競いが、結局新たな規範を生み出すものではなかったことを露呈していくのである。

注

(1) 源氏は斎宮女御に対して、次のように恋情を表出する。なお、『源氏物語』引用は、『新編日本古典文学全集』(小学館)により、一部私に改めた。

(2) 『万葉集』における、額田王の歌を引用する。

冬こもり 春さり来れば 鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ 咲
かざりし 花も咲けれど 山を茂み 入りても取らず 草
深み 取りても見ず 秋山の 木の葉を見ては 黄葉をば
取りてそしのふ 青きおば 置きてそ歎く そこし恨めし
秋山われは(巻第一 16 天皇の、内大臣藤原朝臣に詔
して、春山の万花の艶と秋山の千葉の彩とを競はしめたま
ひし時に、額田王の、歌を以ちて判れる歌)

(3) 『拾遺和歌集』五〇九番歌から五一一番歌は、詞書は異なるが、春秋優劣論に関する歌が置かれている。なお、『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺和歌集』の引用はすべて、『新編古典文学大系』(岩波書店)により、一部私に改めた。

・春秋に思みだれて分きかねつ時につけつゝ移る心は(雑下
509 ある所に、春秋いづれかまさと問はせ給けるに、詠
みて奉りける 紀貫之)

・おほかたの秋に心は寄せしかど花見る時はいづれともなし
(雑下 510 元良の親王、承香殿のとし子に春秋いづれか
まさると問ひ侍ければ、秋もおかしう侍りと言ひければ、お
もしろき桜を、これはいかゞ、と言ひて侍ければ)

・春はたゞ花のひとつに咲く許物のあはれは秋ぞまされる (雑
下 511 題知らず よみ人知らず)

- (4) 共に十世紀半ばの歌合で、『論春秋歌合』では、当座の季節に
左右されるという結論を出している。また、『宰相中将君達春
秋歌合』は、勝敗を決するものではないが、冷泉院女御の懷子
などが加わり、「秋の女御」などの言葉も見られる点で興味深
い。歌合との関連については、稿を改めて論じたい。

- (5) 「春は曙」で始まる『枕草子』の春秋の景物の在り方もまた、
影響を与えていると考えられる。

- (6) 吉野誠氏は「歴史を喚ぶ絵合巻—冷泉「聖代」の現出—」(『学
芸国語国文学』35号 二〇〇二・三)の中で、絵合巻を「史上
の「聖代」ならざる「聖代」を達成した巻」としている。絵合
巻に「聖代」現出を見る時、以後の巻をいかに扱い、斎宮女御
の役割をどう考えていくかは重要な課題であると思われるので、
参考として挙げる。

- (7) 絵合の場でもそれは「定め」として意識されていた。絵合と春
秋優劣論が「定め」という点で対になっている点は重要と思わ
れるので、以下に指摘しておく。

- (8) 先述の通り、『論春秋歌合』においては季節によって変化のあ
るものとして述べられており、また『拾遺集』五〇九番歌など
も実際の季節が重要視される例であろう。

- (9) 藤井貞和「光源氏物語主題論」(『源氏物語の始原と現在』砂子

屋書房 一九九〇) などがあるが、既に周知のものとして扱わ
れていると言える。

- (10) 朝顔巻、藤壺は源氏の夢の中に、次のように登場する。

…夢ともなくほのかに見たてまつるを、いみじく恨みたま
へる御気色にて、「漏らさじとのたまひしかど、うき名の
隠れなかりければ、恥づかしう。苦しき目を見るにつけても、
つらくなむ。」とのたまふ。(朝顔②四九五)

「恨み」を込めて夢に出てくるという点で、成仏していない藤
壺の死後が垣間見える。

- (11) 針本正行「少女巻の春秋論」(『平安女流文学の研究』一九九二)。

- (12) 李美淑氏は、「岩ねの松」という語が明石の姫君に集中して使
われる用例を検討した上で、「物語の深層において「幼い明石
の姫君」の喩として用いられているように思われるのである。」
と述べている。「(「春秋のあらそひ」と六条院の「春の上」—
「岩ねの松」の象徴性に着目して—」『日本文芸論叢』二〇〇
一・三)。

- (13) 玉鬘巻の終わり、衣装配りの場面で、源氏は玉鬘に「曇りなく
赤きに、山吹の花の細長」(③一三五)を贈っている。また、
これより先になるが、夕霧は「八重山吹の咲き乱れたる盛りに
露かかれる夕映えぞ」(野分③二八〇)と玉鬘を評する。

- (14) 春の町は、春秋優劣論の文脈の中では唐風の空間となる。しか
し、河添房江氏は『源氏物語と東アジア世界』(日本放送出版
協会 二〇〇七・一)は他の女君との比較の中で「非唐物派」
の紫の上という位置づけを行っている。「唐物」意識と唐風空
間との差異については、今後詳細な検討を加えていきたい。

- (15) 小林正明「蓬萊の島と六条院の庭園」(『鶴見大学紀要』一九八

(16) 夕霧が女君を喩える際に、現在の季節は無視されている。紫の上に対しては、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き

乱れたるを見る心地す」(二六五)、玉鬘には、「八重山吹の咲き乱れたる盛りに露かかれる夕映え」(二八〇)、明石の姫君には「藤の花」(二八四)と、秋とは関係のない花が列挙される。

(17) 同じく、明石の君、花散里も、夕霧の花の喩の中に入れられることがない。源氏の妻は、本来紫の上も含めて、夕霧に見られなくてはならない立場にあるから当然と言えば当然だが、秋好中宮は妻ではなく、喩える可能性があるにもかかわらず放棄されていると考えられよう。

(18) 次に配られる衣装を見ている場面について引用する。

紅梅ののいと紋浮きたる葡萄染の御小桂、今様色のいとす
 ぐれたるとはかの御料、桜の細長に、艶やかなる搔練とり
 添へては姫君の御料なり。浅縹の海賦の織物、織りざまな
 まめきたれどにほひやかならぬに、いと濃き搔練具して夏
 の御方に、曇りなく赤きに、山吹の花の細長は、かの西の
 対に奉れたまふを、(中略) かの末摘花の御料に、柳の織
 物の、よしある唐草を乱れ織れるも、いとなめめきたれば、
 人知れずほほ笑まれたまふ。梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、
 唐めいたる白き小桂に濃きが艶やかなる重ねて、明石の御
 方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。空蟬
 の尼君に、青鈍の織物、いと心ばせあるをみつけたまひて、
 御料にある梔子の御衣、聴色なる添へたまひて、同じ日着
 たまふべき御消息聞こえめぐらしたまふ。

(玉鬘③ 一三五—一三六)

二条東院の末摘花と空蟬も含め、秋好中宮以外の源氏傘下の女君に正月の衣装が配られる。この衣装配りが契機となつて行われる初音巻の各町の訪問、男踏歌で集まった女君に語られる女楽の計画に、秋好中宮は含まれることはない。

(19) 梅枝巻で入内に際して薫物の調合を依頼する女君の中に、秋好

中宮は入らない。秋の香である侍従は、源氏のものが評価される。そもそもこの薫物合わせにおいては、複数調合しているため季節を重視しているとは言にくい面もあり、また腰結いという役がある以上、秋好中宮に依頼しにくいのも確かであるが、文化空間からの乖離という点で興味深いので指摘しておく。